

屋久島の山守たち。



ひと月に35日雨が降る。
洋上のアルプス。

世界自然遺産。

縄文杉、弥生杉。

1年間に訪れる観光客約30万人。

屋久島——この島の名前を聞いたとき、人々はどんな風景を想像するだろうか。宮崎駿監督作品『もののけ姫』の舞台として描かれた原生林が天を突き、大蛇のように絡み合う根幹が地を這い、直径10メートルを軽く超えるような巨岩が河床にあふれかえる。そんな古代からの大自然で島全体が覆われている様子を想像する人もきっと少ないだろう。

平成20年11月現在、この島で暮らす人は1万3626。最高峰の宮之浦岳

は標高1936メートル。他にも1000メートル級の多くの山を擁し、周囲は132キロメートル、面積502平方キロメートルと、日本で5番目の大きさを誇る島であることは意外と知られていない。世界自然遺産として登録された107・47平方キロメートルは、島の総面積の21パーセント。確かに貴重な自然が残る屋久島だが、そこに人々の営みがあることも忘れられない。

この屋久島がユネスコの世界自然遺産に登録されたのは平成5年。このとき、同じ自然遺産に白神山地が、そして文化遺産として法隆寺と姫路城が、日本で初めての世界遺産として選定された。

世界遺産になったから守らなければ

ならない——。もし、そう考える人がいるとしたら、それは少し違う。

その昔、屋久島は「宝の島」と言われた。

山に鋸が入るようになったのは200年前、その前は斧で伐っていたんですね。山に入って伐り痕を見れば、何で伐られたかは一目でわかります。

泊如竹が奨励する以前に屋久杉は伐られていなかったと言われちよるけど、もっと前に伐られた痕だってあるんです。

泊 如竹(とまり じょちく)
元亀元(1570)〜明暦元(1655)年。屋久島安房出身の儒学者で、彼の進言によって屋久杉の伐採が本格的に始まったとされる。

土埋木とは



屋久杉のうち、かつて伐り倒されたが搬出されずに林内に放置されたもの、伐採された後の切り株、あるいは台風や落雷、枯死によって倒れたものを土埋木と呼ぶ。立ち木の伐採が禁止された後も、土埋木の伐り出しは許可されてきた。運び出せる大きさに伐り分けられた土埋木は、かつて立ち木の搬出に使われたトロッコに乗せられるか、奥山のものにはヘリコプターを使って搬出、安房の貯木場(写真上)に集められる。



職人たちの手によって家具や工芸品などに加工された土埋木。

20歳のころから島の林業に携わってきた高田久夫さん(74歳)が言う。神と崇められ、伐ればあたりがあると恐れられていた屋久杉の伐採が始まったのは、一般的には島出身の儒学者・如竹が奨励したことによると伝えられる。いずれにしても、太平洋戦争が終わった日本は国中が木材を求めており、昭和30年代に入ってチェーンソーが普及を始めると、直径1メートルを超えるような屋久杉がいとも簡単に伐り倒されていった。

伐らないといけな時代だった。そう言われて振り回された。

最盛期の島の人口は2万4000を数えたという。港町・安房から伐採拠点・小杉谷までの森林軌道が整備され、屋久杉を伐り出す小杉谷事業所はフル稼働。小杉谷の集落には、ピーク時には540人が暮らし、家々が立ち並び、学校も建設された。

……だが、それも今は昔。栄華の跡形は、この40年間で育った苔や杉や諸々の植物がすっかりと覆い隠し、陽だまりの庭のように残った小学校の校庭跡



(写真上) 巨大な土埋木を搬出できる大きさに伐り分ける。1本の木を伐り終えるのに4〜5日かかることもある。(写真下) 閉山から約40年たった小杉谷集落跡。この場所がかつて、屋久島の経済を支えていた。



世界遺産に登録されたことで、島の自然の大切さは世界中の知るところとなったが、その価値は島に携わる多くの人々が以前から強く感じていた。島の人々の暮らしが自然との共生を意識し、そのための体制が整えられている

った昭和40年代、立ち木ではなく、以前に伐り倒されたまま放置されている木を運び出す林業を提唱した。それが、島の産業を守り、島の人々の暮らしを守る道だと考えたからだ。

それがもまだ立ち木を伐採していた時代。誰かが伐り捨てたような残り物など……。最初は悔しい思いもしましたが、今では唯一の屋久杉の源材として大切な島の資源になっています。

ずっと島を見つめ、島の将来を案じてきた高田さんは、閉山の機運が高ま

なにか価値を与えたくて付けました。

地では、ハイカーたちがのどかに休息を取る。

日本の戦後復興に木材資源で貢献すべく活況を呈した屋久島・小杉谷の林業は、しかし周囲の自然の貴重さが認識され始めると次第に保護機運が高まり、昭和45年には閉山の道を選択する。人々が守ることを選んだその自然が世界遺産に登録されるのは、それから20年以上も先のことだ。

屋久島が選定された理由は、ユネスコが定める世界遺産条約の次の項目を満たしていたことによる。

- ひときわすぐれた自然美および美的な重要性をもつ最高の自然現象または地域を含むもの。
- 陸上、淡水、沿岸および海洋生態系と動植物群集の進化と発達において進行しつつある重要な生態学的、生物学的プロセスを示す顕著な見本であるもの。
- 神様から、産業へ、そして今、森は環境ということになった。

土埋木とは、伐り倒したはいいが、その巨大さ、硬さ故に、結局運び出せずに放置された屋久杉。40年、50年は当たり前。なかには100年以上も前に倒されたものもあるという。

屋久杉はとてども硬くて重い木です。特に斧で伐り出していたような頃は、山の中でそれを割ったり、時代によっては鋸で挽いたりして人の力で運び出すしか方法がなかった。大変な労力と

危険が伴ったと思います。だから、それができないような状況の木は結局放置されたんですね。でも、木というのは本当にすごい。何十年も横たわっているのに、中はまだ生きていて材として十分に使えるんです。生えて一時代、残ってまた一時代、もう新しく生まれているものじゃないから、いつかはなくなってしまうもんだから、大切に使うっていかんとね。

屋久島の自然と小杉谷

洋上アルプスと呼ばれる屋久島は、海岸線から最高地点(宮之浦岳)まで約2000メートルの標高差があり、亜熱帯〜冷温帯の気候が凝縮されている。島の象徴ともいえる屋久杉は標高500~1600メートルに分布。近代における屋久杉の伐採は、大正12年、小杉谷に「安房官行斫伐所(後に小杉谷事業所)」が開設されて本格化する。戦後は木材需要の急増もあり、谷の中につくられた小杉谷集落、石塚集落の人口が昭和35年に540人になるなど最盛期を迎えた。昭和45年、屋久杉伐採の終焉とともに小杉谷も閉山。現在は記念碑が静かに立つ。



高田久夫さん(山師) 昭和9年、鹿児島県屋久町(現・屋久島町)生まれ。18歳から営林署に勤め、屋久杉の伐採、搬出などに従事。昭和40年ころから土埋木の伐り出しを始め、屋久杉の伐採が禁止されてからは、土埋木を伐り出せる唯一の存在として、島の土産品を支えてきた。



家具、調度品、民芸品……、屋久杉は現在も島の重要な特産品であり、これに携わる人は1000を超えるとも原材料となっているのはすべて、高田さんが山から出した土埋木だ。

私たちは、木を出した後は必ず植樹してるんです。土埋木を伐り出せば、森の中にはぽっかりと空間ができる。だから、周りにある新芽を移してやるんです。自然のままに

放っておいたほうがいいという人もいますが、屋久杉の発芽率というのは1パーセントに満たない程度で、本当にいい環境で、そのときにいい状況でないと発芽しない。しかも屋久杉は実をつけるのが数年に一度で、そもそもその確率がかなり絞られます。

屋久島は、花崗岩の上に薄い表土がのっただけのやせた土地ですから、成長も大変だし台風も多い。



橋口さんが伐出を行う国有林。温暖化対策に向けた国の施策などもあり、ようやく活気が生まれ始めている。

私らとは違うが、橋口君たちのような人たちにも頑張ってもらわんと。

高田さんがそう言う「橋口君」とは、屋久島の森の約2割を占めるという人工林を守る林業家・橋口猛さん(41歳)。屋久島に人工林があるという事は、きつと観光に訪れた人では気づかないかもしれない。いや、必ず目に見えるはずなのだが、それはたぶん見えてこない。世界遺産とはまた違った価値を持つ森。人々が暮らしていくために

だから、この森では常緑樹と屋久杉が互いに寄り添い、助け合いながら生きています。でもね、あまり木が混みすぎてしまうのはよくない。こちらの杉たちもな、これでもう40〜50年は経ってるが、このままでは、もうそんなに成長できません。放っておいたらそのままだ。少し手を加えてやると育ちもいいんだけどな。



ただ、そういうことをすべきか、それとも自然のままに残すべきなのかはよくわからない。だから、いろいろな人の話を聞きたいと思うんです。

数千年を超える樹齢の長さで知られる屋久杉は、極端に成長が遅い。その特徴は年輪を見れば一目瞭然だ。1センチもあれば何本もの年輪が圧縮されたように詰まっている。

土に栄養がないからね、微生物も少なく、病気になるづらい。だから長生きはできるが一方で成長が遅いですよ。

自然の木を伐る屋久島の林業は終わった。今は、残された資源を大切に大切に使っている。また同時に人々は、土埋木さえも一切手をつけないというエリアを設定し、屋久島の自然と、林業の記憶を守っている。

互いに寄り添い、助け合いながら生きています。

数百年前の切り株から新たな木々が育っている。この森と今後どう共存すべきか、さまざまな道が模索されている。

育てている森が、この屋久島にもある

人工林の多くは国有林です。最近、環境という観点から国も動き出して、CO2の吸収源としての森の大切さが問われています。単に木を植えるよりも、間伐をしっかりやって木々の成長を促してやったほうがその効果が高いこともわかってきている。おかげで私たちも仕事を

得ることができています。若い人たちも興味があるようのうちでは2人が一緒に働いています。木を育てることもそうですが、僕は、若い人たちに育ってほしい。でも、山の仕事はきついし、雇用条件もいとは言えない。僕は、普通の会社のようにしてあげたいんです。山の仕事をしながらでも、安心して暮らしていける環境を整えてあげたい。

今の時代、何か環境を守り、誰かがそれを守っている。その「誰か」は、やはり何かに守られる必要がある。生きていくために、暮らしていくために。

目には見えんけど、大切な空気をつくっているという誇りちゅうか、自負ちゅうか。絶対にいいことをしてるんだって。環境林業ですよ。今はそういう意味でのやりがいを感じます。だから、木を伐ったから山が崩れたとか、そういうことは絶対にさせられません

橋口 猛さん(林業家) 写真右

昭和42年、鹿児島県屋久町(現・屋久島町)で林業を営む家庭に生まれ、中学時代に父親の仕事を手伝うなど、幼いころから森に親しむ。鹿児島の高校を経て、神奈川県で数年を過ごす、やがて帰島。30歳の時に父親の森を継いで林業を始め、屋久島の人工林を整備してきた。

浦田 功さん(建築士) 写真左

昭和29年、岩手県に生まれる。建設会社に勤めていた昭和52年、発電所工事のために屋久島を訪れ、その際に出会った島の女性と後に結婚。昭和58年、島に移住する。島産材を使った家づくりをはじめ、屋久島の自然の恩恵を島民が享受できる仕組みを目指して奮闘している。



確かに国有林は、環境のためという大義名分ができて手が入られるにようになってきました。でも、民有林はまだまだそんな状況じゃないし、そもそも間伐された木が主に合板用として使われている現状では、森の価値が高まらない。今、島で新築される住宅の1割でしか、島の材が使われていません。こんなに素晴らしい杉が地元で育っているというのです。屋久島の材を、たっぷりと使った家を、屋久島に建てる。屋久島の大工が建てる。それを屋久島の林業が支える。それは、屋久島の森を、環境を

涙が出ました。
ああ、こんなに育ったんだな、って。

やがて時代はまた変わる時が来る。世界遺産のこの島がこの先どうなるのか……。

そこには、人々との深い関係がある。高田さんが言う。

森という言葉は、「盛り」であり、「杜」であり、「守り」や「護り」であったという。

この島を守ることにつながる。

それが、自然の循環をつくりたい。

人にも環境にもいい、

森を意識できることで、人々の意識が自然と環境に向かうようになってほしい。

この島に

暮らして近い場所です、森を意識できることで、

環境の大切さだけが

守ることでもありません。

独り歩きするのではなく、

暮らして近い場所です、

森を意識できることで、

人々の意識が自然と環境に向かうようになってほしい。

この島に

暮らして近い場所です、

森を意識できることで、

環境の大切さだけが

守ることでもありません。

独り歩きするのではなく、

暮らして近い場所です、

森を意識できることで、

人々の意識が自然と環境に向かうようになってほしい。

この島に

暮らして近い場所です、

森を意識できることで、

環境の大切さだけが

守ることでもありません。

独り歩きするのではなく、

暮らして近い場所です、

森を意識できることで、

人々の意識が自然と環境に向かうようになってほしい。

この島に

暮らして近い場所です、

森を意識できることで、

環境の大切さだけが

守ることでもありません。

独り歩きするのではなく、

暮らして近い場所です、

森を意識できることで、

人々の意識が自然と環境に向かうようになってほしい。

この島に

暮らして近い場所です、

森を意識できることで、

環境の大切さだけが

守ることでもありません。

独り歩きするのではなく、

暮らして近い場所です、

森を意識できることで、

環境の大切さだけが

守ることでもありません。

立ち上がった。橋口さんら林業家、それに建築家や製材業、また観光ガイドなど、木と森に携わる人たちが、屋久島の森と、暮らしと、文化を守ろうと集まった。

その「屋久島大屋根の会」に参加する建築士・浦田功（54歳）さんは言う。

確かに国有林は、

環境のためという

大義名分ができて

手が入られるに

ようになってきました。

でも、民有林は

まだまだそんな状況じゃないし、

そもそも間伐された木が

主に合板用として

使われている現状では、

森の価値が高まらない。

今、島で新築される住宅の

1割でしか、

島の材が使われていません。

こんなに素晴らしい杉が

地元で育っているというのです。

屋久島の材を、

たっぷりと使った家を、

屋久島に建てる。

屋久島の大工が建てる。

それを屋久島の林業が支える。

それは、屋久島の森を、環境を



①屋久杉の苗を育てて人工林に供給している池田春光さん
②人工林の伐採・製材を手掛ける有水速人さん
③林業家・橋口さんの下で腕を磨く若者たち
④ゆるやかな時間を求めて大阪から屋久島に移り住み、島産材で家を建てた松本勝さんご夫妻
⑤土埋木で家具や工芸品をつくる日高利弘さん
屋久島の暮らしと森を守るサイクルが少しずつ形になり始めている。

僕は、30歳の時、亡くなった親父の後を継ぐ形で山の仕事を始めました。山の仕事は、大変なこともいっぱいあるけど誇れる仕事です。

僕がまだ子供のころ、親父が植林した山がありました。何十年かぶりに森になったその山に入ったときには涙が出ました。ああ、こんなに育ったんだな、って。

私たちが守るべきものとは何だろうか。残すべきもの、伝えるべきものとは何だろうか。5年ほど前、屋久島に一つの団体が

